小さき碧

松田 瓊子

雨の日には

碧にとって今は、毎朝、目が覚めるのが楽しいような日が続いた。

渚は、日ごとに、目に見えて上達していく小さいお友達のピアノを、どんなに楽しみに聞いてくれたろう。毎日、午後に碧がピアノを弾けば、渚はつるばらの窓辺の寝椅子で、耳を傾けながら間違いは正し、譜の読めないところは教えてくれた。

渚は碧の一心なお稽古も、どうにかして、病身の自分を慰めようとしているのにほかならないことをよく知っていた。

渚は知らず知らずに涙ぐんで、碧のピアノを弾くまるまるした手元を見つめている。このピアノの事件は二人をいっそう仲良しにしてくれた。

「ミドちゃん、少しはおもしろくなった？」

渚の問いに碧は喜ばしげに顔じゅう笑ませて、

「うん、とっても。もうじき合奏できんのよ。」

そうして、碧はひばりのように毎日元気だった。

「早苗さんはお元気？」

ある日、渚は聞いた。碧は、「ええ。」と言ってこっくりしただけであったが、ちょっとして不審そうに、

「ナーサ、前に早苗さんと仲良しだったの？」

「ええ、学校も一緒だったし、おうちも近かったし、音楽の先生も一緒だったので、よく遊んだのよ。」

渚の明るい顔を見て、不審にたえかねたように碧は聞いた。

「好き？」

「なに？　音楽？」

「ううん、早苗さん。」

碧は小声で応じた、渚は、碧の問いに目を見張ったがすぐにまた元の調子で、

「ええ誰でも好きよ、なアぜ？」

「誰でも⁉　ナーサは誰でも好きになれる？」

碧はびっくりして乗り出してきた。

「ええ、誰でもよ、みんないい人ばっかりよ。」

「じゃ、じゃ、沖本先生もそうなれる？」

「ええ、あのかただって、いいかたよ、それはしっかりして、几帳面で——ね、だってほらだらしのないのよりどんなにいいかわからないでしょう？」

碧は渚の言うことが半分わかるような、わからないような気がしてふーんとうなっていたがすぐに、

3【つるばら】ばらの一種。渚の家をとりまいて咲いている。

1【早苗さん】碧が同居しているいとこで、もともとは渚の友人であった。

16【沖本先生】碧と早苗の家庭教師。

「じゃ、早苗さんもいい人？」
「ええ、いいかたよ、あのかたはいつも、私が、忘れん坊なのを注意してくださったし、私はピアノや本に夢中になりだすと何もかも忘れてしまって、何時間でも何時間でもそのことに吸い込まれてしまってやめられなくなったり、散歩をしてもすぐそのことに気を取られて明日の宿題や、お約束まで夜まで思い出せなかったりするのに、あのかたは決して決してそうじゃないの、やらなくてはならないことはきちんとして、お約束だって決してたがえたことがなかったの、――ね、ナーサは、だらしがないけれど、早苗さんは偉いでしょう？」
渚は、熱心にこう語った。
（本当に、ナーサはだらしがなくて、早苗さんは偉いかしら？　――嘘だ！）
碧の胸には激しい思いが突き上がってきた。いつぞやの夜、早苗が言葉厳しく、病気の人なんか大嫌いと言った声と顔が急に思い出された。大嫌いと言われた病人の渚は、自分はだらしないが早苗さんは偉いと熱心に語っている――。
「だって、だって――早苗さんは病気の人大嫌いって言ったの――それでもいい人、好き？」
碧は激しく息をつまらせながら言ったがすぐに後悔した。渚の目が一時さびしげに沈んで窓の外へ移ってしまったので。
しかしそれは決して長い時ではなかった、渚はすぐ明るい顔に返って言った。
「病気になる前は、私だって丈夫の人のほうが好きだったの、だから早苗さんもそうなんでしょう。」
「ミドはどうしたって沖本先生や早苗さんは好きじゃないもの！」
碧は渚の静かな様子を遮って、激しく頭を振りながら言いきった、渚は、その日はそれっきりそのことについては何も言わなかった。

ある美しい夕方だった。碧は、丘や畑や林や、きれいな小川のある静かな場所を兄に見せようと、晃一を散歩に誘いだした。
菜の花の盛りには畑は真っ黄色になり、ついこの間まではげんげの花で一面赤い毛氈の野になっていたが、今はどこもかしこも緑になり、それでも小川のほとりを行く小路や、細いあぜ路には名もない薄色の野花が咲きこぼれて、碧は、たびたび、足を止めなければならなかった。
田も畑ももう暮れ近く、人ひとり通らない静寂の中に蛙の歌ばかりが高かった。
兄と妹が丘に登って大樹に身を寄せると、ずっと上の方で、緑の梢がさやさやと静かに囁き合うていた。
しばらくの間は二人とも四方の静かな美しさに見とれて黙っていたがやがて、碧が歌いだすとともに晃一も声を合わせ、それも終わると、飛び出していこうとする妹に声をかけた。
「ね、ミード新しいお友達のお話をお兄ちゃまにしてごらん。」
「ナーサのこと？」
碧はすぐに楽しげに言って兄のそばに青い草の上に座った。晃一は、どうか、毎日妹の遊ぶ友達がこののびのびとした妹の性質を痛めない子であってほしいと願っていた。碧は兄の思いなど知る由もなく、ただ自分の本当に愛し尊敬している渚のお話をすることに大きな喜びをもっていた。
碧は一生懸命に語った。今までのことを、一度話したことも、も一度繰り返して。渚が、どんなにいい子であるか、どんなに静かな優しいにこにこした子であるか、また長い間病気で、決

【たがえる】違うようにする。「約束をたがえる」は、約束を破ること。

【晃一】碧の兄。碧は早苗たちの家に、晃一は丘を隔てた祖父母の家に預けられている。

【毛氈】敷物の一種。

して自分のように外にも出られず、美しいものも見られず、歌うことも踊ることも弾くこともできないのに決して「心が悪くならない」――碧は、自分が病気だったり、雨が続いたりして、外で踊り走り回ることができない日が続くと、いつも「心が悪くなりだした」と言った――ことも話した、そして最後に、このごろいちばん碧の心にあることを告げた。ナーサは、誰でも好きで、どんな人でも「いい人」にしてしまう人だということ、早苗が意地悪なことを言っても、ナーサは決して自分のように怒らないで、かえって早苗をほめたことなども。

「ああ、いい子だねえ。」

兄の声に、碧はいっそう目を大きくして、

「ね、ナーサはとてもとてもいい人なの、ミド、はじめナーサの言うことがわからなかったけど、だんだん慣れたらわかるようになった、ナーサは目に見えないお話をするのが好きなの、神様だってエス様だって見えないし、ほらナーサの大好きなママだって見えないでしょ。」

「ああ、そうだったね、それで？」

「ミド、誰だって好きじゃないもの、そしたらナーサは昨日言ったの、神様はミドを本当にかわいがってくださるのと同じように、世界中の人をみんな同じようにかわいがってくださるんだって、――沖本先生も早苗さんも――」

碧は考え深げに、熱心に話し続けた。

「誰だっていいところばっかりたくさんもっている人はないんだって、神様はね、人に気がつかないようなその人のいいところを、探しだして、つかまえてしまうことが、大変お上手なの、――お兄ちゃま、わかる？」

碧は真面目な顔をして、一心に聞いている兄の面をのぞいた。

「ああ。」

晃一はやはり真面目な顔でうなずいて、その先を促すような目をしてみせた。

「それで悪いことはすぐ許してくださるんだってね、だからナーサは神様のまねをして、誰でも、いいところばっかり見るの――神様が世界中の皆を同じようにかわいがっていてくださるから、みんな仲良くするんだって、――ナーサはね、そのこと天に行く少し前にママから教えていただいたのだって。」

「そう、本当にいいお友達だね。」

晃一は静かにそう答えた。

碧はしばらく兄の膝にもたれていたが、急に大きな声で、

「あ、そうだ、ミドはナーサと反対に嫌いなところばっかり見つけてたからだ、――だからだめだなあ。」

「ミドもナーサのようにお友達のいいところや、好きなところばかり探して、見ていてごらん。そうだ、お兄ちゃまもそうしよう、ね、それは神様の本当にお喜びになることに相違ないよ。」

「そう⁉　――そうしたら怒ったり、意地悪しないですむものねえ。」

碧はしみじみと言った。

空は、オレンジから桃色にと黄昏れていった。二人が高い丘から飛び降りて、歌いながら小川のほとりに来かかると、流れは美しい雲と夕空の色を映して、静かに、かすかな音をたてていた。

碧はぴったりと歌をやめて、たたずみ、耳を傾けた。

「歌っている、ね？」

碧は兄を見上げて、ひそかな小川の夕の歌を消すのを恐れるように、珍しい小声で囁いた。

（ナーサに話してあげよう――）
そう心につぶやいて、女の子の目は美しく輝いていた。
四方は、ほのかの黄昏の光の中に、緑の息吹の聞こえるまでに静かだった。
幾日も幾日も灰色の空から、いつ止むともしれないようにだらだらと雨の降り続くときがきた。台所では女中たちがものが腐るとこぼすし、沖本先生はますます眉をひそめて、雨のうちだけでもゆっくり落ちついて勉強するようにと、毎日繰り返すし、早苗は女中たちが音楽室の窓を閉め忘れて、ピアノをすっかり悪くしてしまったと何日も怒っているし、――碧の言葉を借りていえば、皆長い雨のために、「心が悪くなって」いる様子だった。
その中で、碧だけは毎日楽しげに午後になると、赤いレインコートに大きな傘をさして雨の中を「つるばらの家」を訪ねることを怠らなかった。
もう今では、睦夫の作曲したヴァイオリンとピアノのかわいい小曲に簡単な伴奏をすることもできるようになったので、睦夫は病身の渚を喜ばせようと、雨の日は決して持ち歩かない大事なヴァイオリンを抱えて、碧と二人でよく伏見家を訪れた。
午後になると、雨をいっぱい含んでうなだれているつるばらの窓から、たどたどしいがかわいい二重奏や子供のいきいきした話し声などが流れ、外の雨とは無関係のように三つの顔が重なり合って窓からのぞいていた。どの顔も楽しげに輝いて。渚の白い顔、睦夫のばら色の頬、碧の小麦色の顔にリンゴの頬――。
降り続く雨に風さえ加わって、その日はいっそう暗いうっとうしい日だった。
（今日はだめかもしれない――こんなに雨が吹きつけたら道を歩くのだって大変だもの。）

11【つるばらの家】渚の家。
12【睦夫】早苗の弟。碧のいとこ。
14【伏見家】渚の家。

渚はガラス戸に吹きつける雨に、つるばらや、花壇の花を気遣いながらつぶやいた。
「もう三時でしょう？　光さん。」
「まだ少し前でございますよ、今日はいらっしゃいませんかしら。」
渚が声をかけると光さんは、すぐドアを開けて言った。
「私、せっかくごちそうしようと思って、おいしいプディングを作っておきましたのに――」
「でも今日はあんまりひどいから、行き帰りが大変でしょう。」
つるばらの家の中でこうした会話のあった頃碧は横殴りの雨の中を、急いでいた。風のために、大きな傘も、碧の肩から始終後ろの方へ飛んでいったし、レインコートの前は、はだけるし、あんまり急いで歩くので、長靴の中は水たまりのように、びしょびしょで、たえず中の水ははね上がるし――それでも碧は一向平気で、靴の中の水を出そうともしなかった。もっともそれは歩くたびにおもしろい音をたてていた。
キュッキュッ、キュッ、ギュッギュッと。
碧はしっかりと大きな傘の柄を持って、ときどき鼻歌を歌っていた。
「まあまあまあ、碧様。」
碧が台所から「こんにちは。」と勢いよく入っていくと光さんは、びしょびしょの女の子に目を見張って声をたてた。
「ミドちゃん！　まあ大変だったでしょう！」
開け放しのドアから渚の声まで聞こえてきた。
「ナーサ、こんにちは。おもしろかったわよ。」
碧が大声に言うと、光さんは驚いて、手早くコートを脱がせてやりながら、

2【光さん】渚の身の回りの世話をしている女性。

「おもしろいどころじゃございませんわ碧様、まあ、スカートがこんなにグショグショになって！　早くお脱ぎになって、お帰りまでに光が干しておきましょう。お風邪でも召すと大変でございますよ。」
「それまで、じゃミド、ペチコだけでいるの？」
碧はおもしろそうに聞いた。光さんは目を丸くして、
「へ？　なんでございますって？」
ちょうどこのとき、たまりかねて、松葉づえにすがって渚が台所に出てきた。
「ペチコよ、これよ。」
渚は光さんの丸い目と碧の顔を見て、思わず笑いながら、
「ああ、ミドちゃん語でしょ、ペティコート（下着）のことよ。」
「はあ、さようでございますか、私ゃまたなんのことかと思いましたわ。」
「ペチコだけじゃ今日は寒いから、私のおべべ、乾くまで着ていて、ね。」
渚が言うと光さんはすぐ新しいかわいいメリンスの単衣をもってきて、碧に着せかけた。二人の子供はすぐに部屋に戻って、楽しいお三時を共にした。
台所では光さんが、火をおこして、ぬれたスカートや靴下を乾かすのでおおわらわになっていた。水を切ろうと思って、逆さにした碧の長靴から泥水が土間に流れ出たときは、ずいぶん、びっくりした様子だったが、子供たちの部屋から、楽しげな二人の話し声に耳をすませて、しみじみとつぶやいた。
「まあ、渚様もほんとにお楽しげなこと、お二人してああしていらっしゃるところは本当に美しいことだ、私ゃ大好きだ、仲のいい元気な子供さんを見るのは――。碧様ははじめずいぶん聞かん坊らしく思えたけれど、本当におもしろい優しいお子さんだこと。こうしてねえ雨の降る日にもよく訪ねて来なすって……」
体はばかに強そうだが、気立ての優しい光さんは、もう目元をうるませていた。
「ね、ナーサ、今朝、ママからお手紙がきたの、ミド、もう何度も何度も読んで覚えてしまった。」
碧はいかにもうれしげに目を輝かせて言った。
「まあ、よかったわね、なんてきたの？」
「たくさんいろんなこと書いてきたの、ああそうだ、今日、持ってきてナーサに見せたげるんだった。ね、このお手紙の着く頃は、ちょうど雨の続くときだから、また、ミドはおうちの中で『心が悪く』なっていなければ――ってママは心配していますって！　ねえ、ミドちょっとも悪くなってなんかいないわね、毎日ここへ来て遊んだりお話聞いたりできるんだもの、だから今日ママにそう書いてあげるの。」
碧はピアノの椅子に腰かけて、体ごと椅子をぐるぐる回した。
「いいのねえ。」
渚は優しい小声でしみじみと言った。
碧はすぐに、渚の母のことを思い出して、ちょっとの間、渚の顔を、じっと見つめていたが、急に晴れ晴れと、
「ね、ナーサも一緒に書きましょう！　ミドのママに。きっとママは喜ぶわよ。」
碧は飛び上がって、光さんに便箋とペンをもらいに行った。こうして、その午後二人は、遠いお国にいる碧の母に手紙を書いて楽しい時を過ごした。

12【おべべ】幼児語で、服、きもののこと。
13【メリンス】薄く柔らかな織物。婦人服などに使われる。
13【単衣】和服の一種。裏地のない一重のきもの。
14【お三時】三時のおやつ。

4【ママ】碧と晃一の母。夫の仕事の都合で、碧たちを親類の家に預けて一年間インドに行っている。
8【見せたげる】見せてあげる。

「ミドちゃん、高原にはどんな鳥が鳴いて？　今朝ね、珍しくうぐいすが来て鳴いて、ミドちゃんの高原はずいぶん、いろんな鳥がいるだろうと思っていたの。」
碧の目は急にいきいきと輝きだして、思わず、そのまるまるした手をたたくようにしながら、
「いてよ、いてよ！　たくさん、いろんな声で鳴くのが、――ああナーサに聞かせたいなあ、もう今、きっといちばんたくさん来ている頃よ、うぐいすもいるし、カッコーもいるし、知っているでしょ？　カッコー、カッコーって鳴くの。」
「知らないの。」
「知らない？　いい声よ、ねえ、ねえ。」
碧は夢中になって立ち上がっていた。そして、どうにかして、その鳴き声を知らせようとかわいい口をとがらして、郭公の鳴き声を、まねた。
「それでね、私たち、その鳥が鳴きだすと、誰を呼ぶにでもカッコーの鳴き声で呼ぶの、パパア、ママア、おにいちゃま、ミイドオ、って、ね。」
碧は首振り人形のように首を振りながら、なつかしい鳥の歌を繰り返した。渚はにこにこしながら、
「いい音ねえ。」
「そうだ、明日からナーサってカッコーの声で呼ぼう、まだいるわよ、ホトトギスだの、チューアイチュッチュッって鳴く鳥だの、頬白だの、きつつきだの――朝ね、まだやっと、少し空が白くなる頃から、みんなみんな小さいのや大きいのが一緒に合唱するの、だから、ミド、眠っていられなくて、いつも四時頃起きたわよ、あんまりあんまりいい声で、踊れなくて、黙って聞いてしまうの、そして少したつと、空が、ほら、ほら、パッとばら色になるでしょう！　野原も山も

1【高原】もともと碧の家族が暮らしていたところ。

露がね、キラキラいっぱいに光りだすの、それで、それで、ミド野原を走り回ってくるでしょ、おうちへ帰ると、足もスカートもぐっしょりぬれるの。」
「露で？」
「うん。」
「まあ、きれいでしょうねえ！」
渚の目も輝き、遠くの方を見つめながら、高原の朝の美しさを目に浮かべようとした。
「ああ、ナーサに見せたいなあ！　朝、お日様が出たばかりのときね、道にずっとずっと続いて咲いている桃色と白のクローヴァのお花にね、露がたまって、まるでお星様たちのようにきららきらら光っているの！　小さいあやめだの、りんどうだの野あざみだの、野原や丘は踏み場もないくらいよ、そしてお山は藤とつつじで包まれて、お山は燃えるようになっているし。ナーサに見せたいなあ――。そして今に、夕立が毎日のように降るの、どこも、ここも煙るようになって、雨があんまりひどくってちょうど霧の夕立のようよ、それがパッと止むとね、空もお山も落葉松の林も、丘も真っ赤な光に燃えるの。」
渚は思わず大きな吐息をもらした。
「まあ。」
「ねえ、白樺も、丘も、火事のように燃えるの、高原でなくちゃ、あの光はないのよ。」
碧は落ち着いた腰をまたも浮かして、大きく見開いた目には涙がいっぱいあふれていた。
一時にかっと燃え上がるあの真紅の光！
白樺の丘も、落葉松の林も、雲の光と共に燃えるあの静寂の高原の夕。
オレンジ色とばら色に薄れていく牧場や池――。

碧はうっとりとして立ちつくしていた。

ある雨の午後は、渚が碧にお話をした。

渚は、たくさんの美しいお話を知っていた。碧はそのお話を聞くのに飽くことを知らなかった。碧は渚の寝椅子のそばに椅子を引っ張っていって、二つのつやつやした黒い頭と、白い頬とリンゴの頬とは、美しい絵のある本をのぞいて、いつかすれすれになっていた。

その日、渚は「善き羊飼い」のお話をしてくれた。その絵もお話も碧は本当に美しいと思った。

「あるところに、百匹の羊をもった羊飼いがおりました。羊飼いはそれは羊たちをかわいがっていましたので、一匹一匹の羊をよく知っていて、大切に世話をしていました。羊たちも、その羊飼いが大好きでした。毎朝毎朝、羊飼いは、百匹の羊を連れて、丘を越え、岩を登りして、涼しい楽しい野に行きました。そこで一日、羊たちは柔らかい緑の草や、清らかな新鮮な水を飲むことができました。――ね、この絵がそうよ。」

渚はそこまで話すと、ページを繰った。それは目の覚めるような、緑の草原に、黙々と草をはむ羊たちの平和な美しい絵だった。

「あ、高原の牧場よ！」

碧は大きな目を見張って声をたてた。青い空には、白い柔らかい浮雲が休んでいた。草原のずっとむこうには、青い山々が連なっていた。草原には清らかな流れが光り、そのほとりには白い羊の群れに映えて、色もとりどりの花が笑んでいた。大きな木陰には、長い衣を着た羊飼いが羊の群れを見守っていた。

「ね、そして一日中、羊飼いは羊たちの番をしていました。もし、恐ろしい獣が来れば、きっと追い払い、決して、羊や子羊にけがをさせることなどありませんでした。そうして、いつも気をつけておりました。お日様が西に傾くと、羊飼いは羊たちを呼ぶと、羊たちは草をかむのをやめて、大急ぎで走ってきます。羊たちはその主人の声を大変愛しておりました。そして羊たちは羊飼いの後に従ってまた丘を越え、岩を越えて、家路につくのでした。ある日のこと、羊飼いが、自分の羊たちを数えながら小屋の中へ送り込んでいました。九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、けれど、百匹めの羊はどうしたのでしょう？　確かに、一匹足りません。羊飼いは非常に悲しんで、大急ぎで戸を閉め、大変、疲れているのに、彼の失われた羊を探しに、引き返していきました。山を登り、下りしながら大声に呼び歩きだした。岩や石を踏み越えて、谷々を見ながら、呼びながらどんどん道を進みました。もう四方は、暗くなり、羊飼いの足は痛み、疲れましたけれど、決して、迷った羊の上を思うのをやめませんでした。」

「ふーむ、あ、足からこんなに血が流れて！」

碧は次に出てきた絵を見たときに大声に叫んで、乗り出してきた。それは夕闇の迫る谷間に自分の足が疲れ傷ついたのもいとわず、迷うた大切な羊を気づこうて、呼び歩いている、羊飼いの姿だった。碧には、その姿がいかにも優しく、また雄々しく心にしみ込んでいくのを覚えた。

「それで？　見つかったの？」

碧は、気が気じゃなさそうに、渚を促した。渚はうなずいて次のページをめくりながら、

「もう絵がたくさんあるからお話なしでもわかってよ。」

次の絵は本当に美しかった。ほのかな黄昏の光の漂う谷間に、疲れきって、今にも険しい岩から足を踏み外しそうにしている迷った子羊を、やっと見つけ出した羊飼いが危ない岩角から手をさしのべて、その羊を抱き取ろうとしている絵だった。

13【迷うた大切な羊を気づこうて】迷った大切な羊を気遣って。

「あ、危ない！　この羊さん、早く羊飼いのところに走っていけばいいのに！　もう落っこちそうじゃないの。」
碧がまたも大声に言った。
「大丈夫よ。」
渚は次の絵をあげた。
「ああよかった、つかまったのね、この羊さん、ねんねしてる。」
碧の言うように、羊は、ぐったりと飼い主の胸に身を任せ、安ろうていた。
「安心したのね、優しく抱き取って、また岩や石の道をおうちに急いだのですって、疲れた羊さんを決して歩かせなかったの、そしておうちへ帰ったらね、痛む羊の疲れた足に、油をつけてやり、冷たいお水をやって、母さん羊のそばにねんねさせたんですって。羊飼いは、すっかり疲れていたけれどそれはそれは幸せでしたって、そしてね、お友達や隣人を呼び集めて、『私と一緒に喜んでください。失せた私の子羊を見つけ出しましたよ』って大喜びしたんですって。」
絵は白い月の空にかかる背景に、子羊を抱いて家路に向かう羊飼いの絵で終わっていた。
「ふーむ、その人、優しい、いい人ねえ！」
碧はついにこう言った。
「本当に――」
渚は美しい輝いた目をして言ったが、すぐに、考え込んでいる碧を見て、
「ね、この羊飼いはどなたのことといったのかわかる？」
「うん、エス様⁉」
碧の大きな目がいきいきとして、半分自分の答えを疑うような、それでいて自信たっぷりな様子できっぱりと答えた。
「ええ、そうだわ！」
渚は熱心なお話の後で、上気した頬を輝かして、うれしそうに碧をかえりみた。
「じゃ、じゃ、この羊たちは？　――エス様はたとえ話がお好きだったのでしょ。」
今度は碧のほうから熱心に聞いた。
「そうね、羊たちは、私たちのことよ。」
「そう。」
碧はうなずいて、美しい絵を最初から一心に見直しだした。
長い雨の続いていた外は、いつか雨も止み、夕方のオレンジ色の光が、ほのぼのと、四方を包んでいた。
碧は、声をあげて、窓に飛んでいった。ガラス戸を開けると雨上がりのさわやかな空気が、水のように部屋に流れ込んだ。
「ナーサ、ナーサ、お日様が！　明日から晴れるのよお！」
碧は、うれしげに叫んで、窓枠に飛び乗り、まるまるとしたその足を前に伸ばして、胸いっぱい、空気を吸い込みながら、いきいきした声で歌いだした。
「おや。」
碧はすぐ歌をやめて、首をかしげた。
「なあに、ミドちゃん。」
「なにか、甘い甘い匂いがするわよ。」
「なんでしょう。」

渚も、松葉づえにすがって、窓辺に出てきた。
「あ、そう、栗のお花よ、この匂い。」
渚は窓から首を出しながらそう言った。
「どれ、どれ。」
木々の幹は、しっとりと黒く湿り、緑は雨に洗われていっそう輝きを増していた。
栗の花の香の甘く漂う中に、夕日は、雨後のもやの中に溶け込んで、辺りを夢のように柔らかいオレンジとばらの色に包んでいた。
家をめぐる紅のつるばらは、雨をいっぱい含んで光りながら重たげにうなだれている。
碧が歌いだすと、渚は、窓からか細い手を伸べてつるばらにたまった露をそっと振り落としてやっていた。
その夜、渚の父は、母のないこの病弱な娘に、いつもしてやるように、強いその腕に、娘の体を軽々と抱えて、寝室に連れていくときに、問うた。
「どうだ、渚、このごろは毎日楽しく過ごしているかえ。」
「ええお父様、とってもよ、ナーサはそれは幸せなの。」
渚は、輝いた目で父を見上げながら答えた。
「神様は、本当にナーサによくしてくださるの、優しいお父様は在るし、楽しい、いいお友達はくださるし……」
「そう！　それはよかった。」
父親は、娘をベッドに下ろすと、自分の胸のところにある柔らかい頭をなでて、言った。その目は限りない愛にうるおうてさえ見えた。

〈出典『少年小説大系 第二五巻 少女小説名作集（二）』（三一書房、一九九三年）〉

【著者】松田 瓊子（まつだ けいこ）
一九一六（大正五）年―一九四〇（昭和一五）年
小説家。東京都の生まれ。
【著書】『七つの蕾』『紫苑の園』『サフランの歌』など